

復
語
籙
天
橋
立
一

^ 13
3579
1



門 13
號 35.9
卷 1



復 讐
天橋立序
十返舎一九 著
一陽齋用豊國重
天橋立

35.9
1
藏

復讐 あまの 天橋立序 あまの

奇 あまの 古語曰凡而物不事以て勝ハ矢の末に...

肩 あまの 肩 あまの 得の あまの あり あまの 事 あまの 以て あまの 勝 あまの ハ あまの 矢 あまの の あまの 末 あまの に...

道 あまの ち あまの あり あまの たり あまの 中 あまの 以 あまの 諍 あまの の あまの 血 あまの 争 あまの じ あまの 義 あまの 持 あまの の

二 あまの 世 あまの ち あまの あり あまの たり あまの 事 あまの 以 あまの て あまの 遊 あまの の あまの ち あまの び あまの ぐ あまの の あまの 敵

何 あまの の あまの 血 あまの 争 あまの じ あまの 義 あまの 持 あまの の あまの 味 あまの あり あまの たり

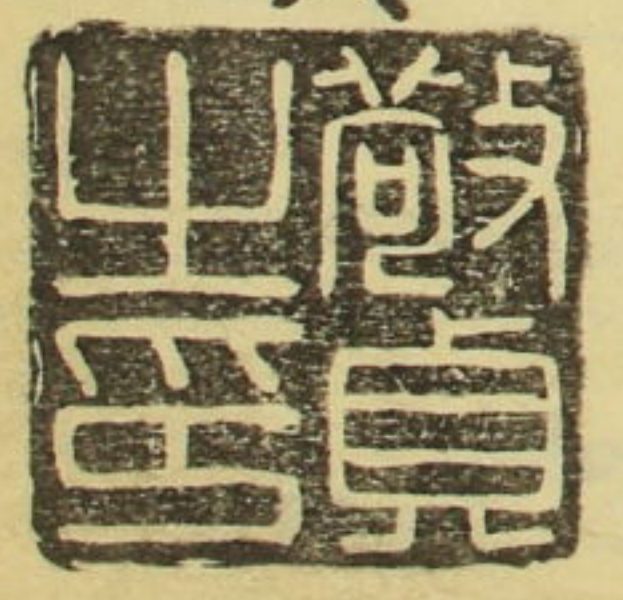
移 あまの と あまの 認 あまの る あまの 事 あまの あり あまの たり あまの 事 あまの 今 あまの 昔 あまの 丹 あまの 物 あまの 承 あまの 尾

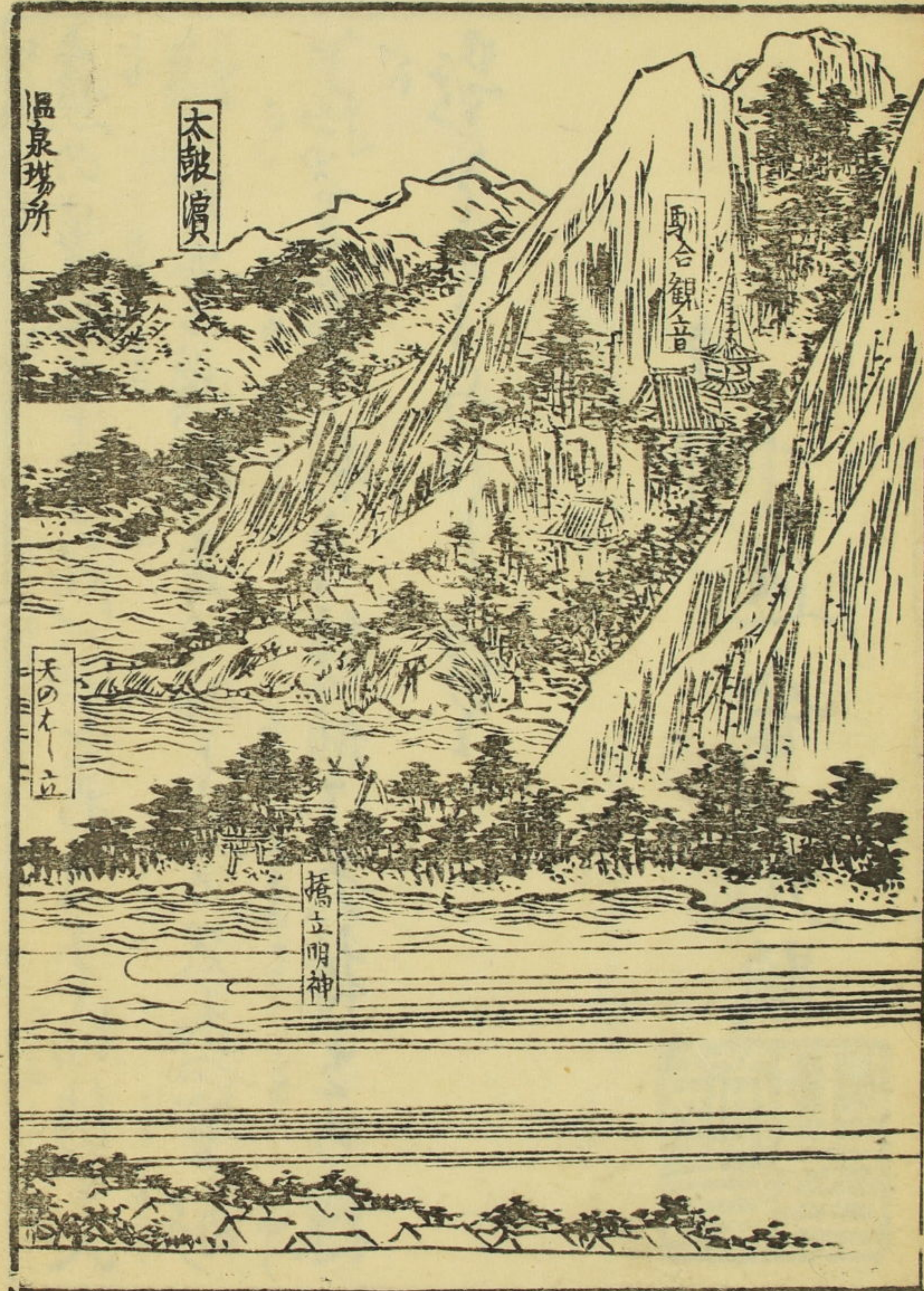
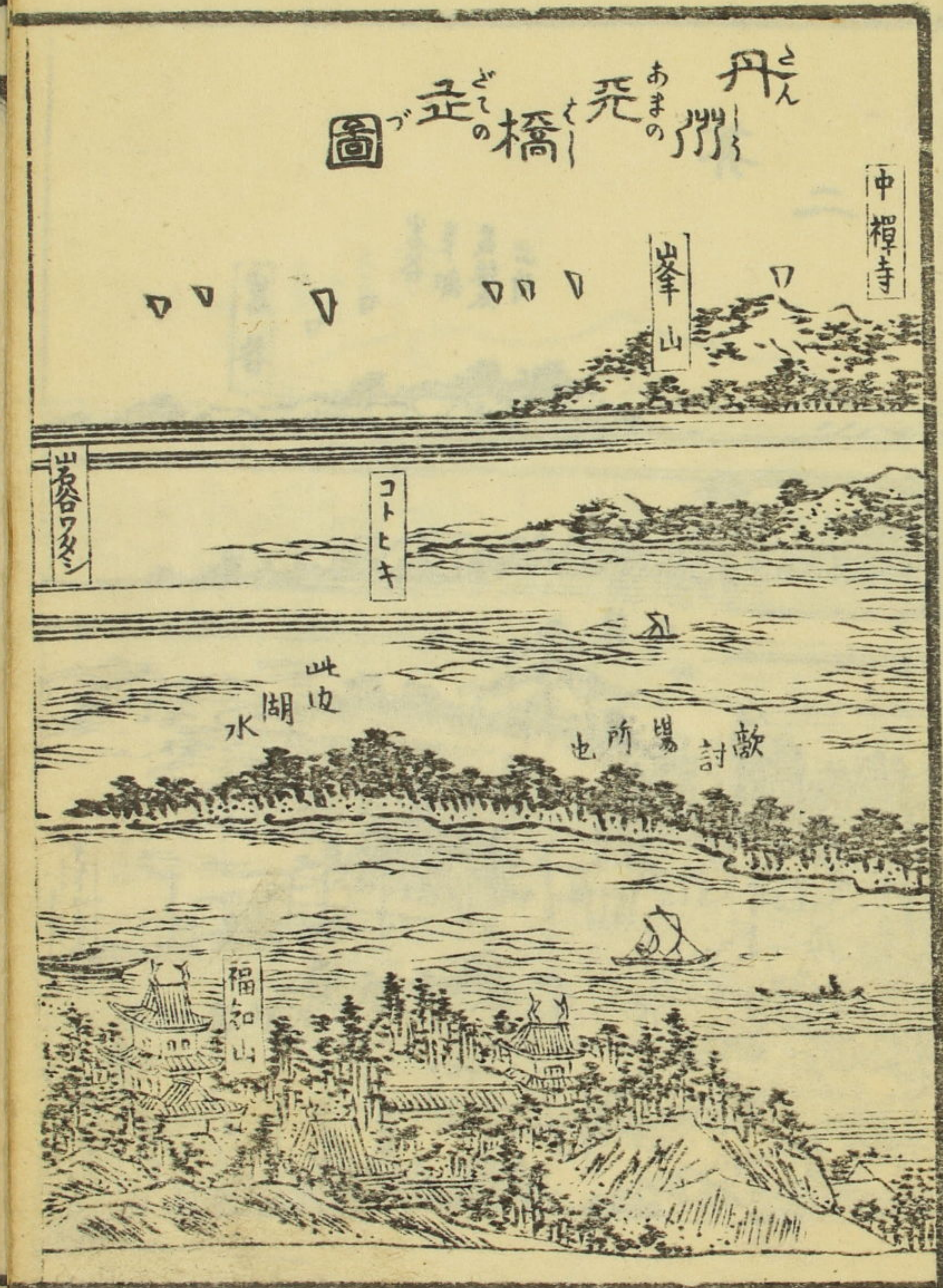
お侍臣大具奇服具の及士あるもの性獲
 度ありして、此と扱死せし血勇の甚お小
 仍てあつ、徳とし、名ある、清仲、目下、部、未
 の災害、は、お、子、逼、ら、う、お、ら、る、終、り、し
 天、手、を、害、し、其、子、作、り、天、を、戴、ぶ、る、の、仇、と
 報、子、英、士、元、伊、勢、山、の、大、名、本、が、同、腹、の、功
 あり、と、と、編輯、し、る、は、同、抄、の、別、合、祝、世、喜、具

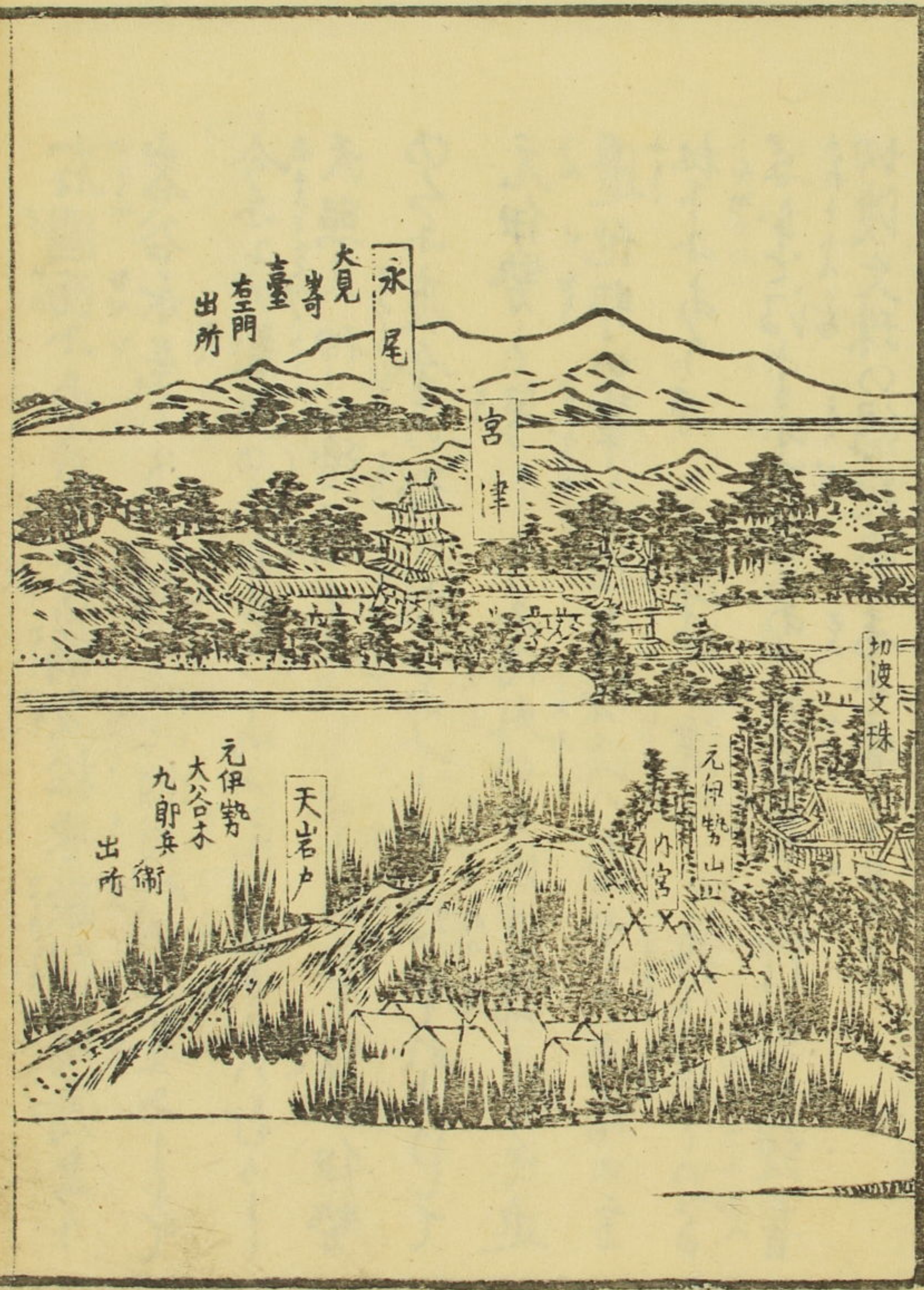
序一

意の甚、的、子、よ、る、所、証、を、あ、ら、ハ、切、渡、文
 珠、の、思、事、出、海、知、意、の、解、と、ら、る、名、物、の、解、
 と、物、を、需、て、帳、子、後、能、と、天、橋、生、の、標
 題、と、し、の、う、ら、り、し、也

東都
 十返舎一九題







二
其

右圖面ふあつるを天の橋立松原敵討場所あり
 岩谷永尾ともふふ北国目代の陣屋ありて
 今ふその影跡のこぼるるふ元伊勢山むら
 天照太神の降臨ましくふあて後伊勢
 のふ度余の郡ふ飛去あふと言傳ふそれよりして
 元伊勢と号し今ふ内外の玉垣連綿として近
 邊他邦の軍とあ清き跡跡ハ天の岩戸西南の方
 林下ふあり号して此地ふ漂泊して丹後橋といふ
 写本とほるふ其まありてふ畧を行列合観音
 切渡文珠の縁記ありふ委く著す

本に

復讐天橋立目録

上之巻

- 中禪寺争論日下部坂弥太米言世の事
- 附り大谷本丸の義経義隆の事
- 大見崎基方門主を嘲弄する事
- 附り義隆御海舟の事
- 大見崎柏坂待伏して大谷本城思ふ事
- 附り大谷本陶水裏宛て事
- 永尾の城主明智の事
- 附り大見崎三族追放の事
- 日下部娘敵討出立の事
- 附り小滝弁上郎助太刀の事
- 大谷本丸の義隆御海舟行の事
- 附り看賣代七郎の事

中之巻

下之卷

孝子折余孫負命の事

附安達与丑平新曲の事

与丑平おととを助むる事

附鑄大の傳六与丑平を捕る事

大谷本基屋を討渡る事

附青坂妖怪の事

折と深室の津小身と沈る事

附飯貝丹下色情小犯る事

大谷本藤僧と首塚を争ふ事

附盗賊丹波治良の事

大谷本丹波と管錢問答の事

附大見寄強悪乃事

西國犬上瀬觸る事

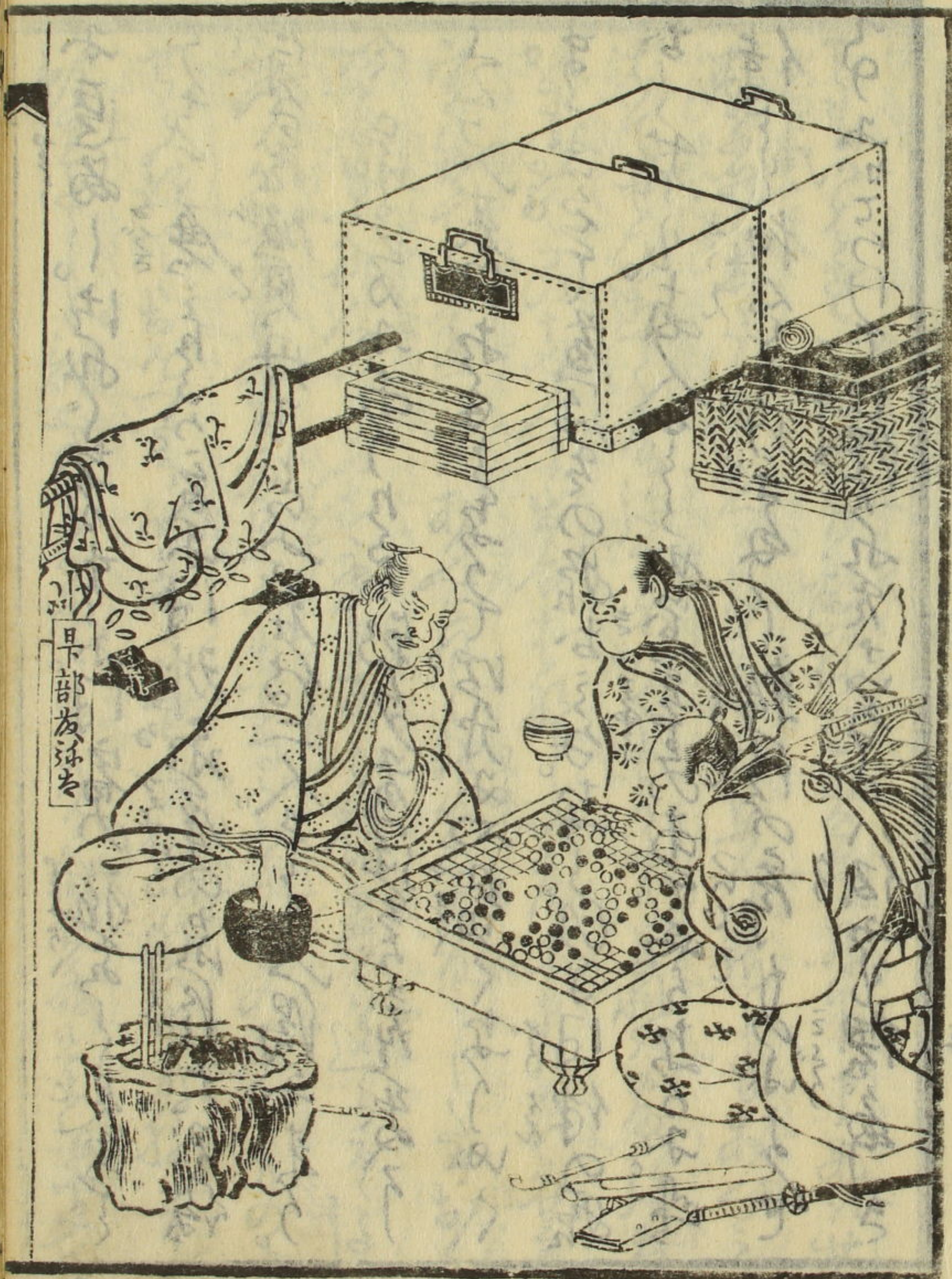
附大見寄強悪乃事

風聲 夜話 天橋立

東都 十返舎一九編

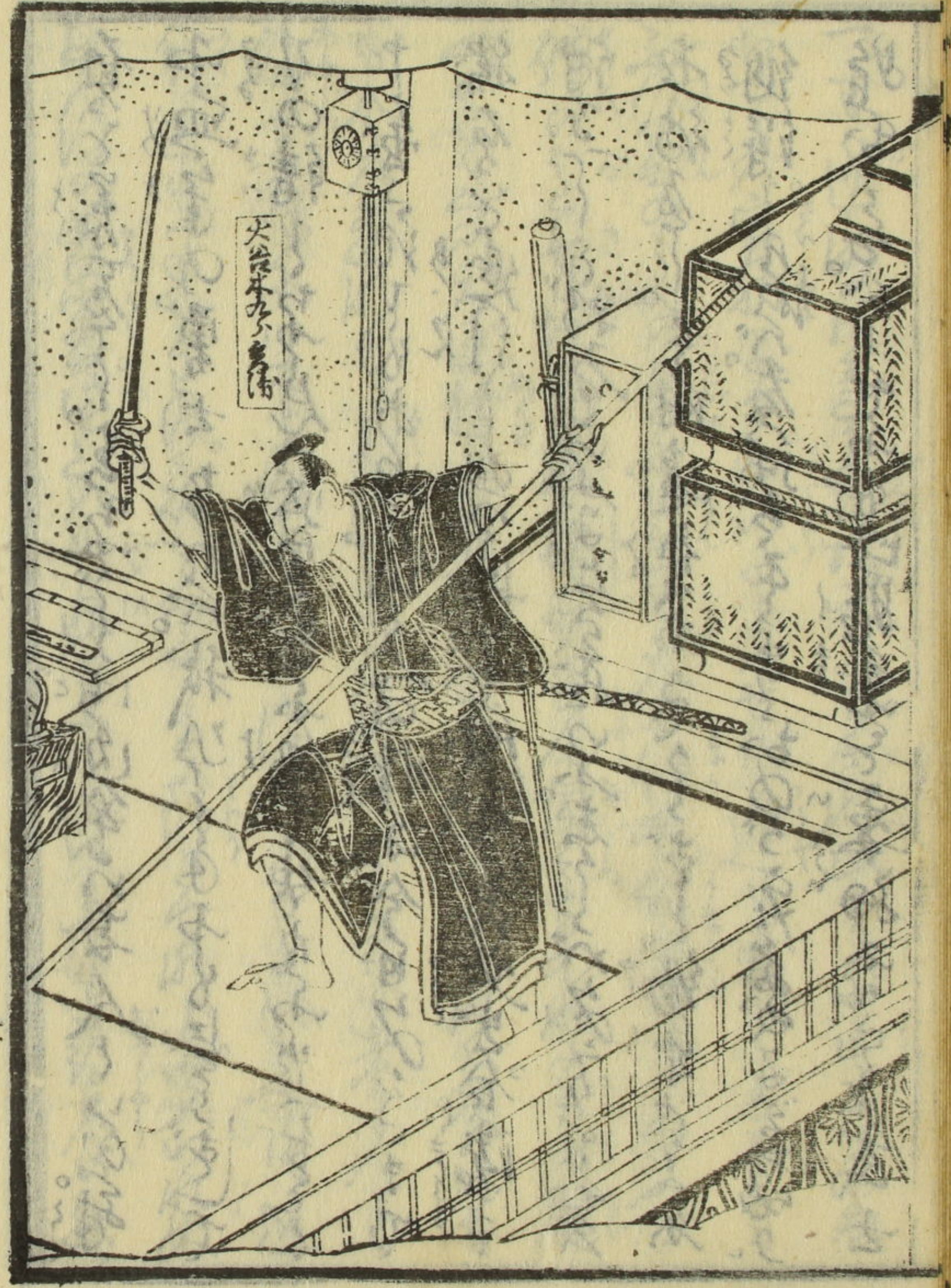
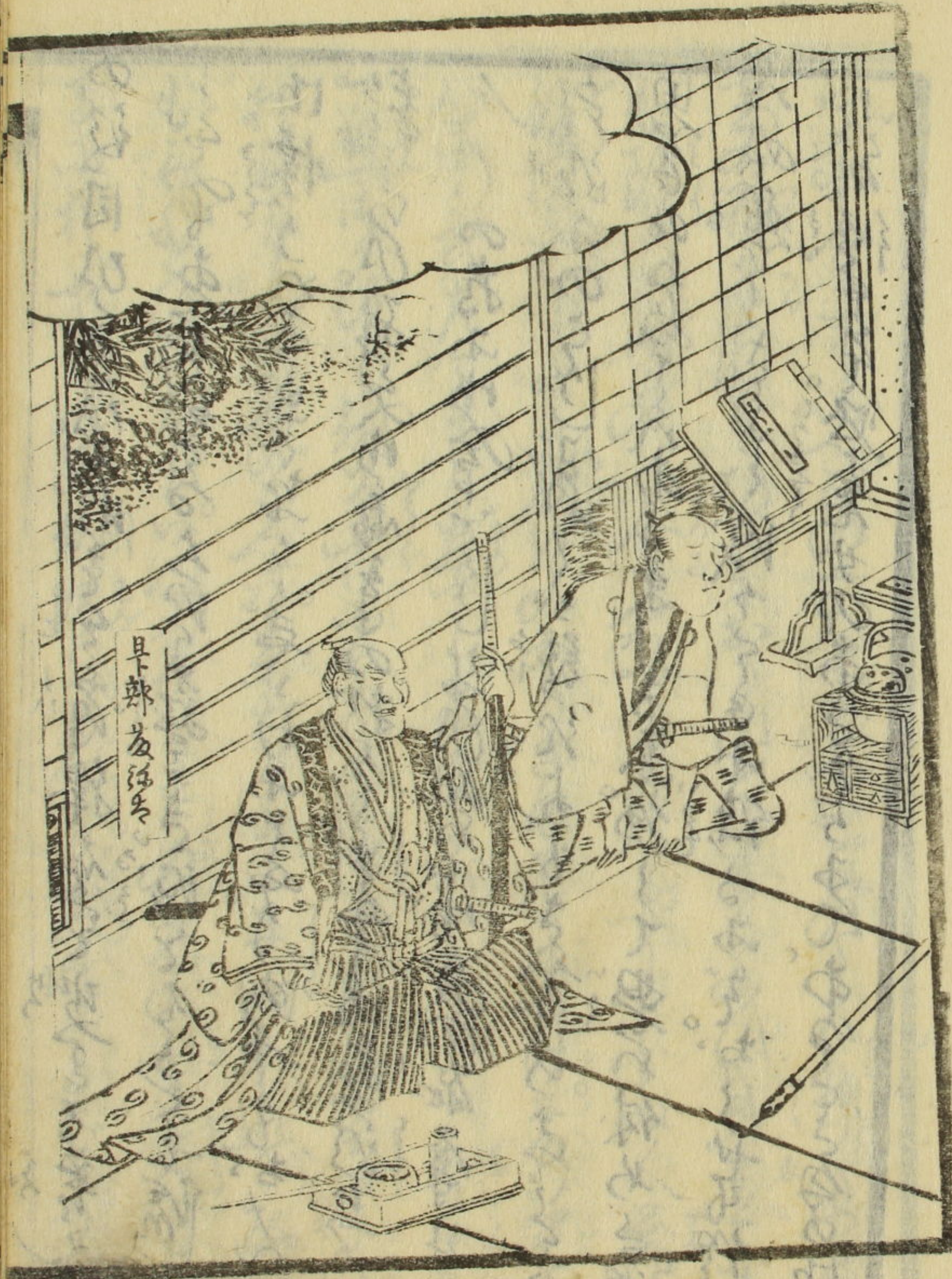
○第一回

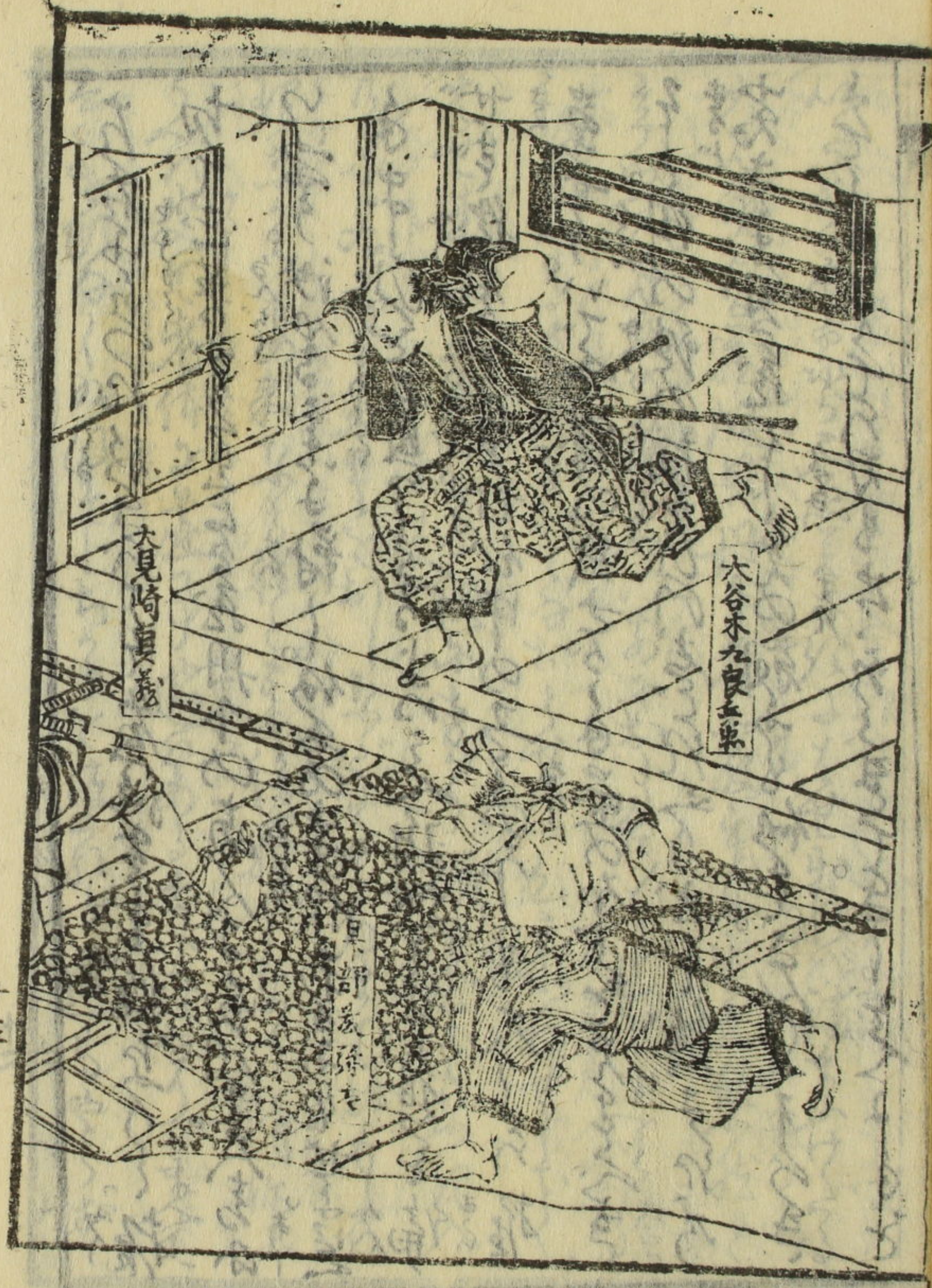
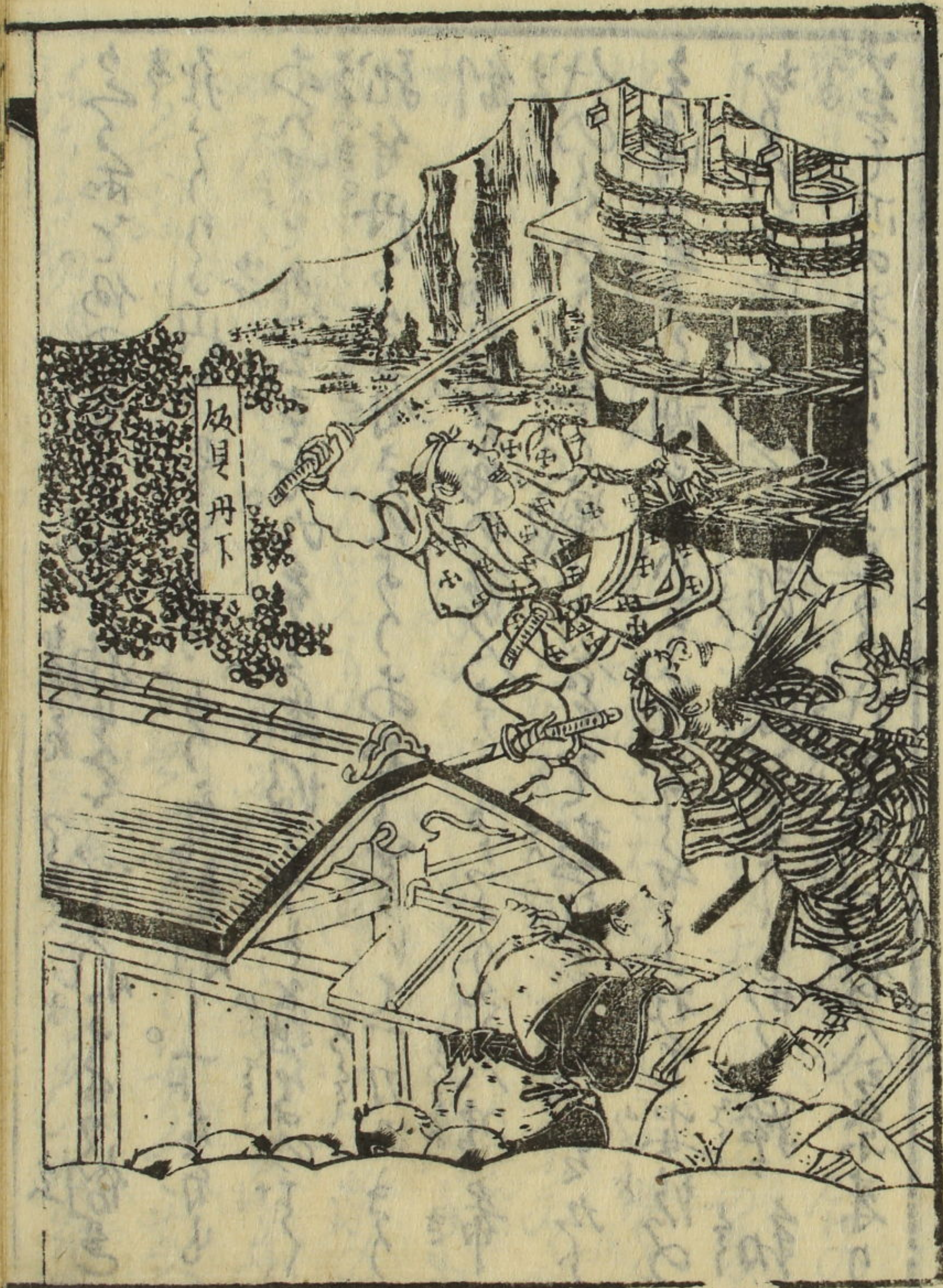
丹波国峯心より行程をせしと阻て申候事
ありし所は丹波大津路人の程病を助せんが事
山中ふ涌山より湯をとりて湯とあらしむ事
難治の病とてふ湯をたぎらばいふ病癒ありと
言ふ事
あらしむ事とて。近を花那の宿家にて候ひ候事。



小豆あし。はれぐさ方す。不日富の娘あし。其を
くもて。唐の島に。安不日。別家尾の島に。大い。後
白雲。風貝。丹下。の。若侍。二人。も。入。偶。ふ。ま。り。
今。白雲。が。る。か。小。あり。なる。が。物。々。と。唐。海。を。が。唐。島。へ。り
く。ま。り。入。其。の。お。手。と。あ。り。て。は。分。み。可。易。く。あ。り。ぬ。く
ま。り。ふ。ら。て。唐。海。を。の。娘。お。さ。ひ。子。あ。り。ひ。子。は。侍。の。娘
お。さ。せ。り。も。あ。り。お。さ。せ。り。ぬ。ま。り。の。あ。て。あ。り。なる。子。は
侍。も。枕。を。う。け。さ。ぬ。一。輪。の。席。の。の。ふ。よ。せ
る。ふ。か。て。う。け。て。は。唐。島。へ。た。つ。る。も。八。飯。も。櫻。が。あ。り

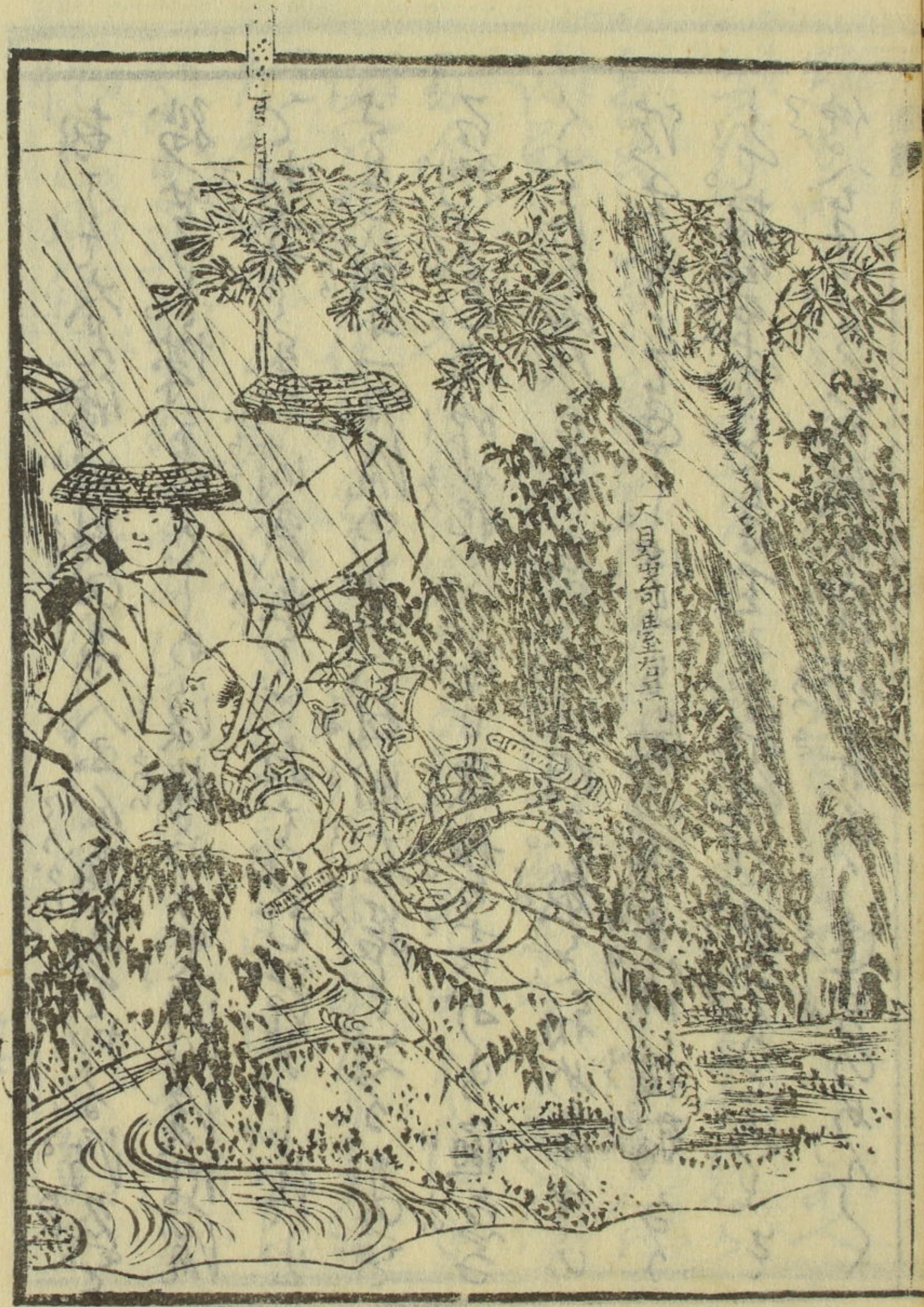
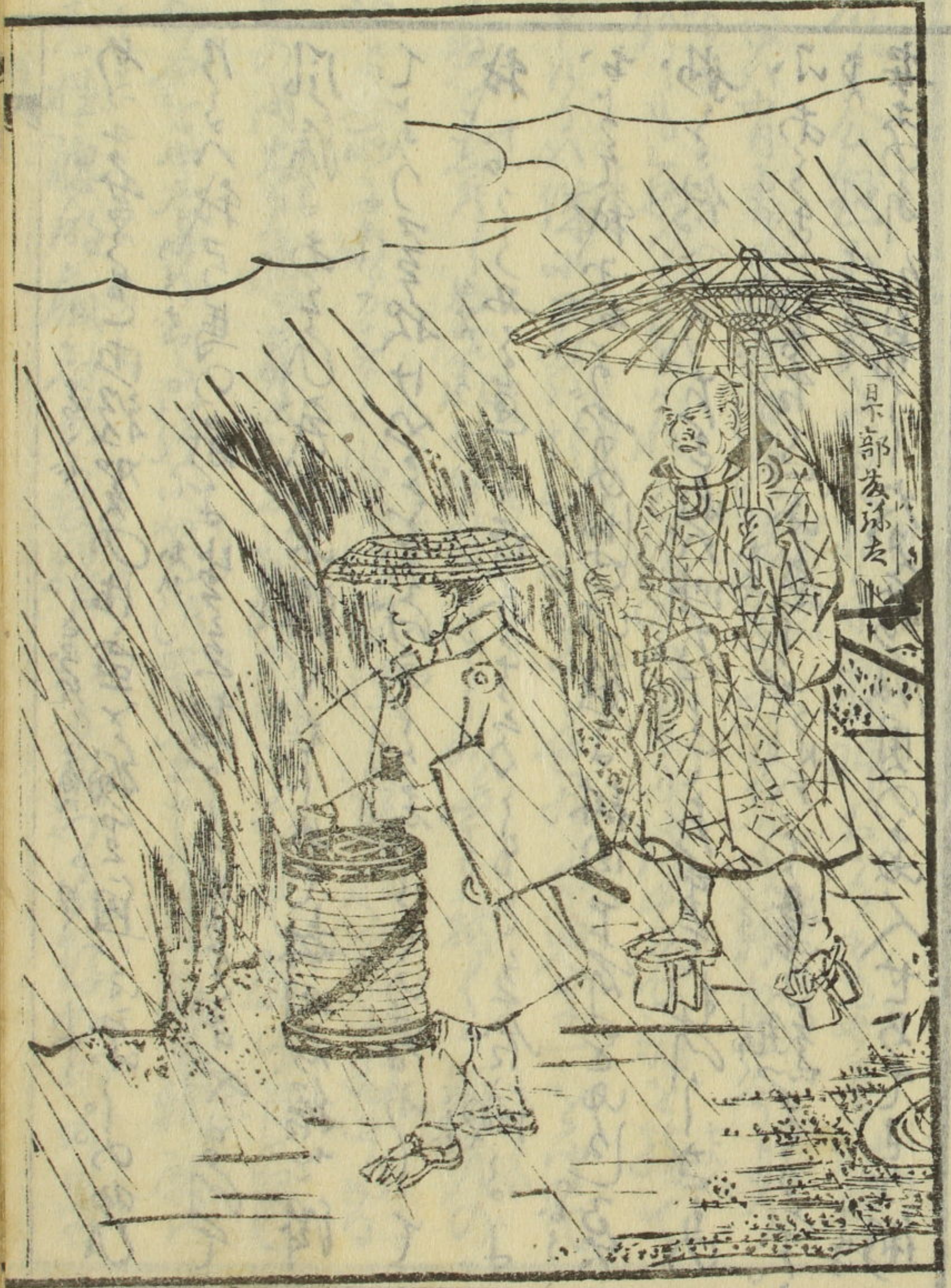
も。い。を。き。一。向。ふ。お。放。し。た。白。雲。は。丹。下。に。あ。り。せ。
勢。を。あ。さ。り。ぬ。ま。り。の。再。三。あ。り。娘。も。あ。り。ぬ。
た。り。せ。り。の。あ。り。ぬ。唐。海。を。か。く。く。く。り。ぬ。が。唐。海。を
か。き。ぬ。り。の。あ。り。ぬ。小。豆。を。ぬ。り。の。席。に。か。り。ぬ。各。の
室。を。て。中。國。の。島。に。あ。り。ぬ。れ。い。我。の。島。に。あ。り。ぬ。一。つ。お。ん
あ。り。ぬ。へ。船。の。よ。り。あ。り。ぬ。あ。り。ぬ。勢。を。あ。り。ぬ。さ。り。ぬ。は
あ。り。ぬ。あ。り。ぬ。の。た。必。定。は。あ。り。ぬ。あ。り。ぬ。の。唐。島。の。島。に。あ。り。ぬ。の。子
せ。り。ぬ。あ。り。ぬ。の。島。に。あ。り。ぬ。の。島。に。あ。り。ぬ。の。島。に。あ。り。ぬ。の。島
の。島。に。あ。り。ぬ。の。島。に。あ。り。ぬ。の。島。に。あ。り。ぬ。の。島。に。あ。り。ぬ。の。島





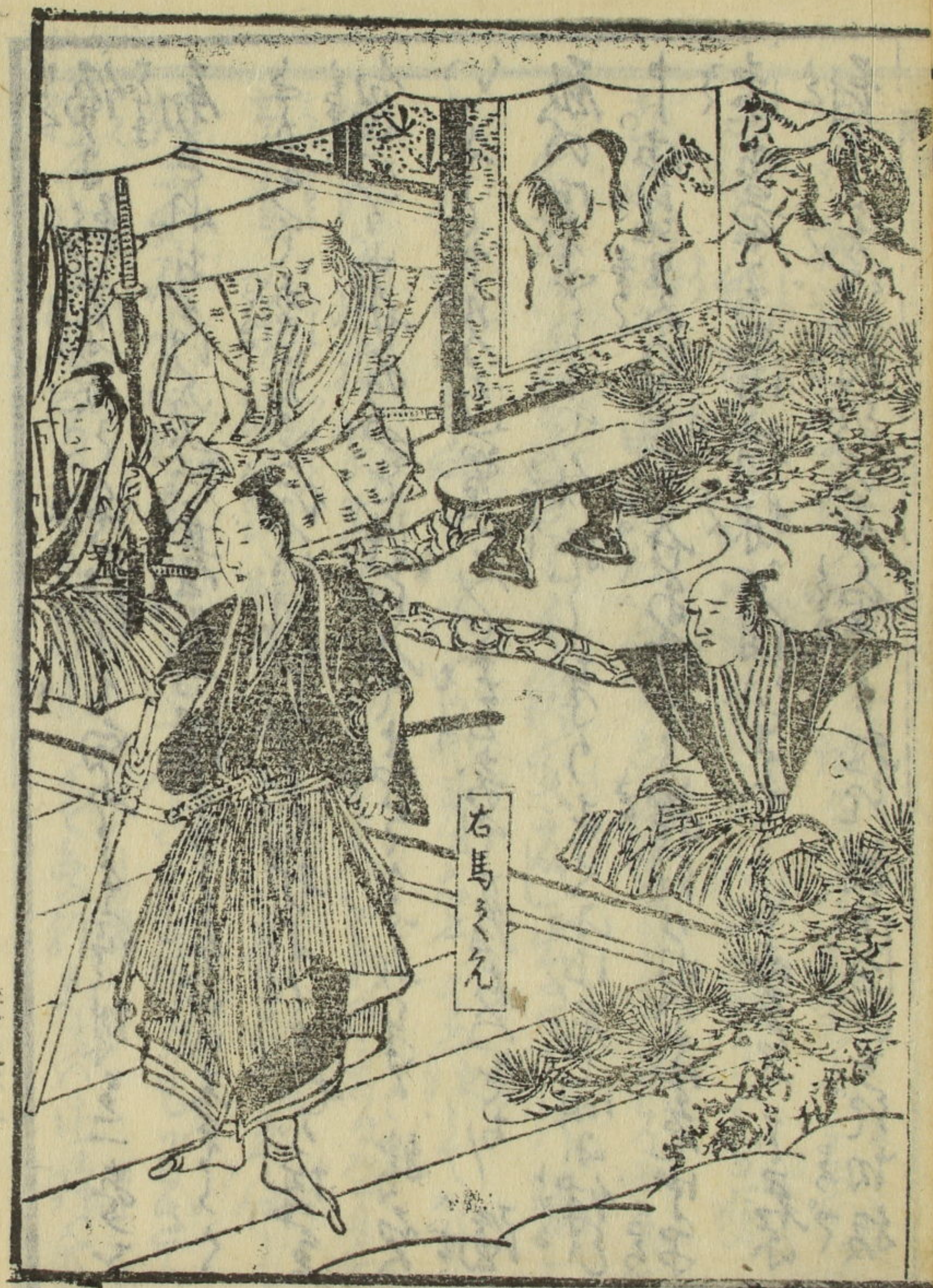
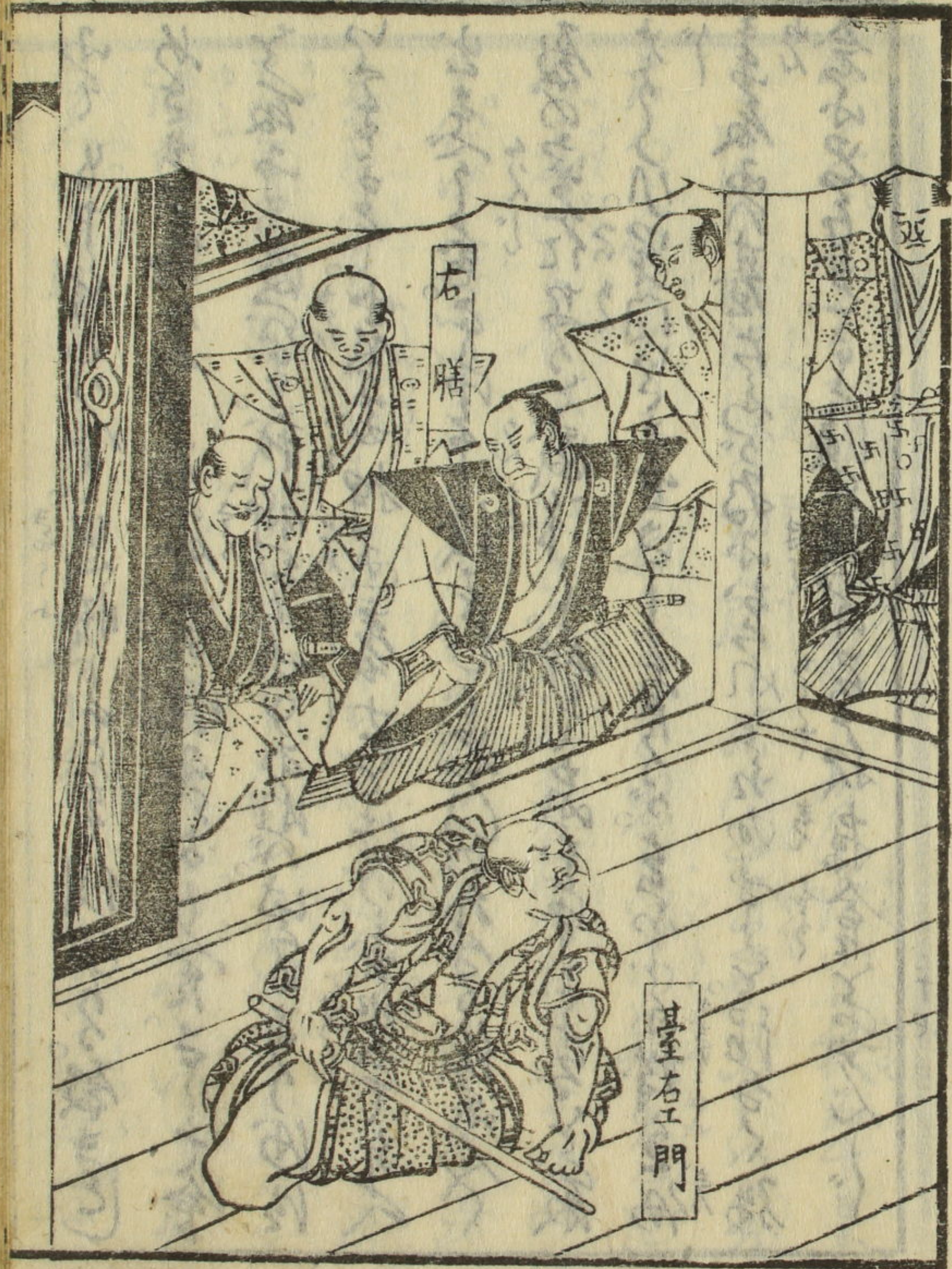
此方の一件を人の口は疑わたりと扱ひて隔て
のりへ摩訶婆利と稱するをわねりたる今日も是を
粟中元院とてしり小由仁とて是を世に人引か
りり小由仁を名を途申すは合符の事なり
是も小由仁の一人小由仁中縁もあらずにせし
友誼をよやく似たり。見と記すは准者が持せし
凡六月もあらずかりにわねりてはあらずに
指ひ合相をなすは中縁もあらずに人引か
りり。是も是れとありては中縁もあらずに
十六

の侍長日比谷友誼をなすは中縁もあらずに
疑ひ合相をなすは中縁もあらずに人引か
の心内をよやくは中縁もあらずに人引か
討てまゝとせん。是も是れとありては中縁も
かまじく扱ひては中縁もあらずに人引か
まの深きまの合縁もあらずに人引か
かまじく扱ひては中縁もあらずに人引か
たり。是も是れとありては中縁もあらずに
磯基をの頭出ては中縁もあらずに人引か



めとせりま。血殺の由言と物言。因ふまゝのめひ
乃と我弓馬のあまはまきまぐら。是をとおやまひて
風流にあそび。武たふ舞く。をめて林田た結を解
てよつて。まけけんとまげまが。まぐくのるあして
我あぐら。あまき。はふまの。もとま合。ゆるま。
おと我おあ。あまの。は。は。は。林田。ま。ま。ま。ま。
妙を。傳。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
不。あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
安。あ。の。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。

あぐ公怒あぐ。おお鬼神あう。も。あ。は。あ。
るの。あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
必しも。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
中。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
この。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
天性。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。



通く此をこれ来思麻中し我をよやく何事取
おの付返せん。母が内門の事。日取を例と備
唯。官舎もさうなうりなげにうきあてもさあ
あくの義者ふや体も屋敷。自中の御代も
まじり思ひの外やてその内はあふ猪りて健ち
いふかや。其をちらの事。若の事ふしを流さる。別
練愛の余計あり。事家の流計もまじり。初より終
候あり。とと初候ふ。潜居のうら鴨も控を
と候。こら候ふと候き。まじりも悔意あり。むしり
十六

堪まかさ移て。たぐそあらんまよても。海へを歌の曲ま
ら。とあまもまよて。あまを打ち入る。大ままの魂感。を
至天晴。その助もあま。其家係。今より。梅河
右指。候ふ我降。荒し。むしり。中。西。と。揚。を
り。其。甚。を。ち。系。伏。し。屋。の。お。り。して。か。り。を。乳。も。登。
乃の私。あ。ら。ぶ。る。不。思。存。を。と。智。の。ぬ。大。事。の。や。り。
思。を。ぶ。る。感。も。る。不。思。存。あり。と。お。ふ。洋。海。し。ま。ね。が
そ。耐。味。ま。た。り。し。ハ。か。や。別。強。道。一。の。海。不。比。真。
至。極。の。一。矢。あり。公。は。た。さ。や。い。ふ。あ。の。こ。り。よ。ま。を。た。つ

那里。素の甲くも里代苗家の縁を御を武門子
 おて候あも候せし心と抱きも何れもよたの作
 出さる申彩六由示しぬら七味玉のさかやう
 まは清洲が身自義中釋さふがて掃記をうけ
 うりも新が性名位候もうぬあるふ候とて是と
 討さるやも。深子にわくいそまほむとてのりか死
 才高ちりまてきてさぬがてて先まて病まし披
 落し出候と意を空にま岩のその味もふま誠
 うりくの始まてて分の候款日中船有候ま六討

海ふもいませ元候勢山の太る年とべ付そらむを
 渠へいぬり意の傑ある史術とあづけ付ぬんとひ先
 海宅しその系初の家をうらむら北とあぬり。或所
 とくそ海と延引し及びりと毒を目をまよとまぬが
 殿由候法沙ゆらむとあてといへもまら。汝が縁舞の
 子業よりいそま向のそま九高まぬとやん。經令神人
 忍没の働あつともよもは候むるのみあるまどさせり。
 行附もまろく彼地ま誠中懐をまよし。亡尋の積
 持りまらま七腰別せんと波平行安の刀心もづら

